

令和2年度入学（一般入試 後期）試験問題の出典

総合政策学部

| 種別 | 大問 番号 | 著者名 | 著作物名 | 書名等 | 版元 |
|-----|----------|----------------------------|-------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|
| 小論文 | 資料A | ニコラス・G・ カー 著 篠儀 直子 訳 | ネット・バカ ーインターネットがわた したちの脳にしているこ と | 青土社, 2010年より, pp.16-19 | 青土社 |
| | 資料B | 朝日新聞 | スマホ教育 小学生から | 朝日新聞社, 2018年9月1日付朝 刊より * 朝日新聞社/朝日 新聞出版社に無断で転 載することを禁じます * ウェブサイト公開 承諾番号 20-1664 | 朝日新聞社 |
| | 資料C | 河野 通和 | 「考える人」は本を読む | 株式会社 KADOKAWA, 2017年より, pp.16-17 | 株式会社 KADOKAWA |
| | 資料D | ニコラス・G・ カー 著 篠儀 直子 訳 | ネット・バカ ーインターネットがわた したちの脳にしているこ と | 青土社, 2010年より, pp.94-95 | 青土社 |

令和2年度 一般入試・後期

総合政策学部

小論文 (90分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、4ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

資料(A)～(D)を読み、以下の問いに答えなさい。

問 1 資料(A)の下線部が具体的に意味していることを 25 字以内で記しなさい。

問 2 資料(B)によれば、記事が書かれた 2018 年の 5 年前からの 5 年間で、ネット依存が疑われる中高生の数の伸び率は何パーセントか。四捨五入して 2 桁の数値で答えなさい。

問 3 なぜ、インターネットを長時間使用していることが、集中力や深く考える能力の欠如をもたらすことになるのか。その因果関係を資料(A)、(C)、(D)の内容に従って、250 字以内で説明しなさい。

問 4 インターネットの使用が不可避となりつつある現代社会において、注意散漫に陥らずに自分自身の考えを深めていくためには、わたし達はどのようにしていくべきか。資料の内容を踏まえ、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

資料(A)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。

(ニコラス・G・カー著、篠儀直子訳『ネット・バカーインターネットがわたしたちの脳にしていること』、青土社、pp.16-19, 2010年より、一部改変)

資料(B)

子どものネット依存が急速に広がっている。厚生労働省研究班の調査で、依存が疑われる中高生は5年間で約40万人増え、93万人に上ると推計された。子どものスマホ所持が当たり前になるなか、どのようにネットとつきあい、依存を防ぐか。病院や教育現場で模索が続く。

「たった5年でこれだけ深刻化しているとは」

全国で93万人の中高生がネット依存の疑いがあるという推計を発表した31日の会見で、調査に加わった国立病院機構久里浜医療センター(神奈川)の樋口進院長は「未来を担う子どもたちに適切な対策がなされなければならない」と危機感をあらわにした。

同センターは2011年、国内で初めて「ネット依存外来」を開設。現在は年間で約1500人が受診し、約7割が未成年という。患者の低年齢化も進んでおり、昨年は10歳未満の子どもも初診で訪れた。それでも、本人が来院を拒んで家族だけで訪れる人もおり、実態が見えづらい部分もあったという。

樋口院長によると、受診者のほとんどが「ゲーム障害(依存症)」で、オンラインゲームにのめり込んでいる。患者によっては脳が萎縮して理性をつかさどる機能が低下し、「わかっているもうまくできない」状態になる。こうした場合は▽朝、起きられない▽遅刻・欠席▽ひきこもる▽物に当たる、壊す▽家族に暴力をふるう——などの症状も現れるという。

受診者には、カウンセリングやデイケア、入院で治療にあたっているほか、親子で話し合っテネットを利用する時間を決めることなどを勧めているが、限界もある。樋口院長は「深夜は未成年がゲームにアクセスできないようにするなど、抜本的な解決策を模索しなければならない」と語る。

(『朝日新聞』2018年9月1日付朝刊、「スマホ教育 小学生から」より、一部改変)

資料(C)

ニコラス・カーの指摘で驚いたのは、ある単語ひとつをとっても、印刷された文字として読む場合と、コンピュータの画面上で読む時とでは、われわれの脳が受ける刺激はかなり違うということでした。

端的に言えば、印刷された文字はわれわれを“注意散漫”にすることはありません。むしろ「ひとつの静止した対象に持続的で途切れることのない」注意や思考を向けさせます。ところが、大量の情報や刺激が行きかうインターネットやコンピュータの画面上で文字を追っていると、その逆の方向——つまり「間断なく反射的に焦点を移すこと」に振れがちなのです。

〈一連の印刷されたページを読み進むことは、読者が作家の言葉から知識を得るために有益なだけでなく、作家の言葉が読者の心の中に知的な感動を引き起こすためにも有益だ。長時間にわたって一冊の本に熱中することで開かれる静かな場で、人々は自分自身の方法で物事を関連づけ、自分自身の方法で推理や類推をし、自分自身の考えをはぐくむ。本を深く読みながら、彼らは深く考えてもいるのだ〉

また、電子書籍と比較した際の「紙の本」の利点として、「何もしない」ことが挙げられています。すなわち、紙の本は「読書以外にすべきことは何も提供せず、目の前でページを開いて横たわり、わたしが目を落とすのを静かに待っている」と。

(河野通和『「考える人」は本を読む』, 株式会社 KADOKAWA, pp.16-17, 2017年より, 一部改変)

資料(D)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。

(ニコラス・G・カー著、篠儀直子訳『ネット・バカーインターネットがわたしたちの脳にしていること』, 青土社, pp.94-95, 2010年より, 一部改変)